

牧師室から(2022.1.9)

この頃、救急車の通る音が度々聞こえてくる。近くに止まっているような感じがすると、必ず外に出て場所を確かめる習慣がついた。なぜならば、教会近くに年配の方々が何人か住んでおられて、気になるからである。

祈祷会の後、救急車のサイレンが聞こえて、一人の方が「救急車乗ったことがあるか」と言い出すと、「私は何回か乗ったことがある」という話し合いになった。そういえば、私も一回乗ったことがある。

東北にいる時のある冬のことである。仙台にある教区センターの運営に関わっていた私は会議を終えて、太陽が沈んでいくのを見ながらセンタービルの玄関を出た。うっすら暗闇の中で急いで駅に向かっていった。その時である。センターの職員が「先生、よかった、こちらに来てみてください」と何か緊急なことが起こったような感じで言った。ついて行ってみると、何人かに囲まれて青年一人が倒れていた。「私の前をこの人が歩いていたのですが、いきなり倒れたんです。韓国語で何かを言っているが分かりませんよ」と、職員が心配そうに言った。彼のいう言葉が韓国語だと気づいて、私を呼びに走ってくるころであったのだ。私は道端に横になっている彼に声をかけてみたが、意識が朦朧として話すこともできない状態であった。急いで救急車を呼び、私も同乗することとなった。

救急隊員は走っている車の中で、一生懸命に彼に心臓マッサージをしながら声をかけていた。仙台市内の大きな病院につき、急いで病院の中に彼は運ばれた。その騒ぎの中でも彼は眠っているようだったが、ベッドに移して医者が検診をする間に徐々に意識がもどって来た。

上手ではないが、ある程度の日本語で医者と話し合いができる。前もこのようなことがあったようだ。今日は、このまま帰っても良いが、いつか詳しい検査を試してみる必要がある、という医者の話を後にして病院を出た。

二人で歩きながら「大丈夫？」と声をかけると、「はい、大丈夫です。お世話になりました。申し訳ありません。有難うございました。」と丁寧にお礼の言葉を言った。センター近くのワンルームマンションに友だちと一緒に同居していることと、仕事で日本にいたが、その仕事を止めたので、他の仕事を探しているということであった。ボソボソ暗い顔で言っている彼は、30代半ばだというが、それより若く見えた。休みたいのか、早く帰りたいが彼を止めて、「私が何かできることがあるならしたいので、連絡してね」と名刺を渡して別れた。

暗闇の中で、遠くなる彼の後ろ姿を目で追いながら、なぜか悲しく切ない気持ちになった。彼は倒れて無意識の中で母国語である韓国語で何を言っていたのだろうか。小さい部屋で友人と暮らしながら、仕事もなく、健康状態も良くないのに、なぜこの他国に居続けようとするのだろうか。これから体は大丈夫だろうか、いろいろな思いが交差した。

もう15年前のことであるが、彼は今、どこで何をしているのだろうか。体は大丈夫であろうか、教会と牧師という文字が書かれている私の名刺を見ながら、教会の門に少しでも近づく気持ちになればいいのに、と糸でも掴むような気持ちで祈っている。

(鈴木善姫牧師)